台大日本語文研究第 37 期
2019 年 6 月，頁 39-62
2019-03-05 收稿，2019-05-31 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201906_(37).0003

解讀岩野泡鳴「五部作」《斷橋》之附錄
—著眼於文本生成的過程—

王憶雲*

摘要

岩野泡鳴的生涯代表長篇「五部作」，文本經過多次修改、發表以及出版，其最終型態為新潮社出版的《泡鳴五部作叢書》。此叢書之第二部《斷橋》收有〈附錄〉，乃本文中被刪除的部分，變成了四則短篇小說。本論文以其中一篇〈阿鳥的苦痛〉為中心，進行文本比較，藉由其改稿方式，來探討泡鳴的意圖，並試問〈附錄〉存在的意義。

文本共有三種：最初以短篇小說形式發表的 A，連載長篇小說的一部分 B，以及最後〈附錄〉所收的文本 C。經過比較，由於 B 整體的主角是田村義雄，泡鳴依據自身小說理論「一元描寫」進行詳細而徹底的修改，將阿鳥設定為唯一的焦點人物，因而有了 C；A 在發表當時因人物的心理描寫獲得文壇好評，泡鳴便繼續深化心理描寫的手法，B 因此而生。

透過〈附錄〉文本的生成過程，我們可以看到泡鳴在不同的階段嘗試不同的小說寫法，這個特徵亦是理解「五部作」文本其複雜形成過程與方法演變的關鍵。

關鍵詞：岩野泡鳴、五部作、斷橋、改稿、一元描寫

* 淡江大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study of the Appendix in *Dankyo* from the Pentalogy by Iwano Hōmei: The Process of Text Formation

Wang, Yi-yun*

Abstract

The Series of Hōmei's Pentalogy published by Shinchosha Publishing Corporation is the final form of Iwano Hōmei's Pentalogy, his representative novel. In the series, the second part *Dankyo* contains an appendix, which presents the texts that are deleted from the main body of the novel. These texts has be published for three times. A being previously published as a short story, B included in a serial novel, and C, the last part, serving as the appendix.

This study conducts an intertextual analysis on "The Suffering of Otori", one of the short stories in the Appendix, to explore how Iwano revises the texts and why the Appendix exists. The analysis shows that C is revised to solely focus on Otori in the story based on the Theory of One-Dimensional Narrative proposed by Iwano himself, while B greatly increases psychological descriptions of the characters compared to A. From the text formation of the Appendix, it is clear that Iwano attempts in different ways at different stages, which epitomes the formation of the Pentalogy.

Key words: Iwano Hōmei, *Pentalogy*, *Dankyo*, Revisal, One-Dimensional Narrative

* Assistant Professor, Department of Japanese, Tamkang University

臺灣大學學術期刊資料庫

岩野泡鳴『断橋』の「附録」についての考察
―テクストの生成過程に着目して―

王憶雲*

要旨

岩野泡鳴は〈五部作〉に繰り返し改稿の手を加えた。『泡鳴五部作叢書』が〈五部作〉の最終形態であるが、第二編『断橋』には本篇から削除された四つの断片が「附録」として収められている。本稿では「附録」のうち、〈お鳥の苦み〉の生成過程に見られる改稿を通して、泡鳴の意図を明らかにする。

〈お鳥の苦み〉は、独立した短篇小説として発表されたもの（A）、連載小説として発表されたものの一部（B）、叢書『断橋』所収（C）、という三つのテクストが存在している。それぞれの内容に大きな違いはないが、人物の描写方法が異なっている。まず、A と B を見る。A は人物描写に心を砕くことで、文壇で高い評価を得た。これに自信を得た泡鳴は各人物の内面描写をさらに増やし、B を世に送り出したのである。次に、B と C である。B は義雄を主人公とした物語の一部であったが、C はお鳥を焦点人物とする物語に再生産されている。この改稿は、〈一元描写〉に基づいたものである。

このように、泡鳴が小説家としての活動を開始してから〈一元描写〉へ向かう過程において、様々な方法を試みた跡が見られる。「附録」は、〈五部作〉や〈一元描写〉を理解する上で見過ごせない重要なテクストなのである。

キーワード：岩野泡鳴、五部作、断橋、改稿、一元描写

* 淡江大学日本語文学系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

岩野泡鳴『断橋』の「附録」についての考察
―テクストの生成過程に着目して―

王憶雲

一、〈新潮五部作〉第二編『断橋』の「附録」

岩野泡鳴の長篇小説に、自らの北海道放浪の体験を生かして作り上げた〈五部作〉がある。この作品群は、『放浪』『断橋』『憑き物』『発展』『毒薬女』という五つの長篇小説で、その成立過程はかなり複雑である。それぞれ複数回発表・出版されたこともあって、各本文に相違があるなどの問題が存在している。多くの先行研究があるが、論者も「岩野泡鳴〈五部作〉の構想と生成」(『国語国文』平二九・六)において詳しい考察を行っている。泡鳴は、大正八年頃から自ら改訂を加えた『泡鳴五部作叢書』を四冊目まで出版した。この新潮社により刊行された〈五部作〉を論者は〈新潮五部作〉と呼ぶ。〈新潮五部作〉に対して、本来泡鳴が構想していた〈五部作〉を〈初出五部作〉と呼ぶこととする[1]。

〈新潮五部作〉第五編として『毒薬女』も刊行される予定であったが、大正九年に泡鳴が急逝したことによって、実際は出版されていない[2]。また、〈新潮五部作〉と時期的にほぼ重なる泡鳴の仕事がある。大正七年一〇月、泡鳴が『新潮』に「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」を寄せ、〈一元描写〉が「わが国の発展について、他日必ず世界の小説界を一新せしめるものだと信じてゐる」[3]と発言した後も、補足や反駁の論を次々と発表している。「一元描

---

1 論者の考察では、泡鳴は〈新潮五部作〉の完成を、大正三年「毒薬を飲む女」を『中央公論』に発表した時点だと見ている。

2 『中央公論』(大三・六)に発表された初出は「毒薬を飲む女」となっている。その鈴木三重吉編『現代名作集第五篇』(大三・一二)と同編『第八篇』(大四・二)の上下二冊の単行本に、同じ表題で収められている。現在我々が見る『毒薬女』は、国民図書版『泡鳴全集』に収録されているものである。

3 『岩野泡鳴全集第十一巻』(臨川書店、平八・八)322 頁。以下、「附録」に関連するテクストの引用は初出によるが、その他の泡鳴の作品は、臨川書店版『岩野泡鳴全集』から引用する。全集から引用する場合は、巻数と頁のみ

臺灣大學日本語文學系

写とは？」(『文芸倶楽部』大八・一〇）がその一つで、「小説に於ける一元的描写の事は」、「やがて一冊の書物に纏め度いと思つてゐる」[4]と書いている。また、泡鳴の日記「巣鴨日記第三」大正八年一二月二六日の項に、「一元描写論の著述を初めた」とある[5]。これらの記述から、泡鳴は〈一元描写〉言説を単行本として整理しようとしていたことがわかるが、これも急逝によって、世に問う機会を失った。泡鳴は死の直前まで〈新潮五部作〉の改訂・出版と〈一元描写〉言説の整理に、力を注いでいたのである。

〈一元描写〉を考察する論考として和田謹吾の「〈一元描写論〉の成立」[6]がある。和田謹吾は泡鳴が「この描写論を実際の作に適用しようと」して、「五部作を厳密に検討し始め」たと指摘し、この理論によって泡鳴が〈五部作〉を整理したと見ている[7]。大久保典夫氏も、「解説・解題」で〈新潮五部作〉と初出本文との異同によって、「泡鳴は五部作の連作を書き進めながら」、「一元描写論の主張を深化・徹底させ、その過程で五部作の一元描写による改訂と全体の編成替えを意図したようだ」と述べている[8]。現在のところ、泡鳴は〈一元描写〉に基づき五部作を改訂したという考えが定着している[9]。

〈新潮五部作〉第二編『断橋』(大八・九、以下「叢書『断橋』」と略す）に泡鳴の「はしがき」があり、その中に、次のような断り書きがある。

> 前篇のはしがきに於いて断わつて置くことを忘れたが、両篇とも元のままではないのである。もとの形では一元描写の標準を外れた箇所もところどころあつたので、それをすべて（分量に

を示す。

4 第十一巻、337 頁

5 第十四巻、273 頁

6 初出は『国語と国文学』(昭三五・六)。以下の引用は『描写の時代：ひとつの自然主義文学論』(北海道大学図書刊行会、昭五〇・一一）による。

7 注 6 和田掲書、155 頁

8 大久保典夫「解説・解題」(『岩野泡鳴全集第二巻』臨川書店、平六・一〇）485 頁

9 高山京子「泡鳴五部作について」(『文学と教育』第四三集、平一四・六）も、大久保氏の指摘を踏まえ、泡鳴の改稿の「最大の目的は、全体を一元描写に統一する」と述べている。80 頁

臺灣大學圖書館藏日文資料庫

> 於いて両篇から原稿紙殆ど百枚分を）削除した。そして主人公を別にして助かつた物だけを三つ、本篇の附録に収めて置いた。[10]

「前篇」とは、〈新潮五部作〉として最初に刊行された叢書『放浪』（大八・七）のことである。泡鳴は、叢書『放浪』と第二編とに〈一元描写〉による改訂を加えたと述べている。「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」にも、『放浪』と『断橋』とについての言及がある。次のような内容である。

> また、徳田秋声氏や野上弥生氏の如きは、僕に向つて短篇は僕の云ふやうにしても書けるが、長篇はそれでは書けなからう、書き苦しからうと云ふやうなことを云つた。が、そんな呑気で書けないのは長篇ではなく、天衣無縫の如き芸術をである。少し口幅ツたいが、今の僕は長篇に於けると同じくこの態度を取つてゐる。（但し、『放浪』や『断橋』だけはまだ、この見地から云ふと欠点があつたので、その原稿八百五十枚のうちから百枚分ばかりは割愛した。）[11]

ここで泡鳴は〈一元描写〉は長篇小説では実践しにくい論理だという批判に反論している。そして、彼は自らの理論によって〈初出五部作〉としての『放浪』と『断橋』の原稿のうち、「百枚分」、すなわち約一〇パーセントの内容を「割愛」したという。

ところが、特に留意しなければならないのは、この「割愛」した部分を「本篇の附録」として叢書『断橋』に残した事実である。自らが唱えた理論から外れたものを、あえて単行本に残した泡鳴の判断には、釈然としないところがある。削除という強い意志を示す行動に対して、「本篇の附録に収めて置」くという選択は弱腰にさえ見え、泡鳴の言う「割愛」の意味が曖昧になってしまう。また、「附録」がテクストの一部として存在していることは動かない事実である。読者が叢書『断橋』を手にする際、「附録」の存在はその読書に影響

[10] 第十五巻、469 頁
[11] 第十一巻、337 頁

臺灣大學學術期刊資料庫

を与えないとも限らない。

この「附録」は、四つの短篇から成っており、「お鳥の苦み」「お鈴の家」「氷峰の断片」「勇の家庭」という表題がそれぞれ付されている。これらは時間的な流れにおいて連続したものではないため、無造作に叢書『断橋』の最後に並べられたかのように見える。「附録」に関する先行研究として、再び大久保典夫氏の解説を引く。

> 一元描写への統一の必要上削除された最大なものは、「毎日電報」（明治四四・一・三〇～二・一一）の部分で、これは「お鳥の苦み」と題して叢書『断橋』「附録」に収められた。ほかに、『放浪』初版「二九」と「三〇」の部分が削除され、前者は「氷峰の断片」、後者は「お鈴の家」と題して「附録」に収録された。用字・語法その他の異同もある。[12]

さらに、「勇の家庭」に関して、大久保典夫氏は次のように述べている。

> 一元描写による改変の代表的な例は、「三」の田村義雄不在の場面での有馬勇の心情とその妻お綱とのやりとりを削除しているところで、この部分は「勇の家庭」と題して叢書『断橋』「附録」に収録された。

また、〈五部作〉本文の異同をまとめたものとして、伴悦『岩野泡鳴―「五部作」の世界―』（明治書院、昭五七・三）に収録された『断橋』『憑き物』『発展』の「校異」や、『岩野泡鳴全集』第二巻と第三巻（臨川書店、平七・二）の「解説・解題」がある。ただ、管見の限りでは、〈五部作〉の本文に焦点を置いたものがほとんどで、〈一元描写〉から脱落した部分を「附録」として収めた泡鳴の行動に関しては言及されていない。

その行動は、単に泡鳴が自身の作品に未練を残したものと見るべきだろうか。それとも、他の意味があるのだろうか。小稿ではこれを課題にして考えていきたい。

---

[12] 注 8 掲論文、486 頁

臺灣大學學術期刊資料庫

二、「附録」というテクスト

ここから、叢書『断橋』「附録」の「お鳥の苦み」を中心に、初出・初版との比較を通して、「附録」に関する泡鳴の意図を確認したい。「お鳥の苦み」は四篇の中では最も長く、〈五部作〉の第二主人公とも言える清水お鳥が主役を演じている。

「お鳥の苦み」「お鈴の家」「氷峰の断片」のテクストは、「附録」所収の本文を含めて、三つ存在している。「お鳥の苦み」の内容と重なるものは、初出の「病客」(『趣味』明四三・六)と、「毎日電報」に連載された『断橋』の第二五回(明四四・一・三〇)から三六回(同・二・一三)である。「お鈴の家」と「氷峰の断片」は、島田氷峰と原口お鈴の周辺の動きを描いたもので、初出の「結婚問題」(『ハガキ文学』明四三・六)と、初版『放浪』の二九・三〇回がその内容に重なる。つまり、附録の生成過程を、

テクストA:独立した短篇小説として発表されたもの→

テクストB:長篇小説の一部→

テクストC:叢書の附録

という図式で示すことができる。それをまとめたのが、次の表である。なお、便宜上、Cの表題に〈 〉をつけたものを各グループのテクストの名称として用いる。

臺灣大學學術期刊資料庫

△表

テクスト	A（初出）	B（連載・初版）	C（附録）
〈お鳥の苦み〉	「病客」（『趣味』M43.6）	連載『断橋』二十五回～三十六回（『毎日電報』M44.1.30～2.13）	「お鳥の苦み」叢書『断橋』「附録」（新潮社、T8.9）
〈お鈴の家〉	「結婚問題」（『ハガキ文学』M43.6）	初版『放浪』三〇回（東雲堂書店、M43.7）	「お鈴の家」叢書『断橋』「附録」（新潮社、T8.9）
〈氷峰の断片〉	「結婚問題」（『ハガキ文学』M43.6）	初版『放浪』二九回（東雲堂書店、M43.7）	「氷峰の断片」叢書『断橋』「附録」（新潮社、T.8.9）
〈勇の家庭〉	なし	初版『放浪』三回（東雲堂書店、M43.7）	「勇の家庭」叢書『断橋』「附録」（新潮社、T8.9）

五部作の初出や初版を集めた臨川書店版『岩野泡鳴全集』第三巻には、A がそれぞれ「参考資料」として収録されている。前述した第二巻の大久保氏の「解説・解題」以外に、第三巻の伴悦氏による「解説・解題」に、A と B の異同に関する記述がある。伴氏は、「病客」に関しては、「叢書に比して、多少の削除が散見されたり、空白部分が二個あったりするが大した異同ではない」とし、「結婚問題」に関しては「それぞれ部分的に削除されたり、改補されているが大きな異同はない」と述べており、さほど問題視していない[13]。また、「附録」は、臨川書店版『岩野泡鳴全集』には収録されていない。

〈お鳥の苦み〉は、清水お鳥が缶詰事業のため東京を離れた不倫相手の田村義雄を訪ねて、一人で北海道に到着したところから始まる。お鳥は義雄の宿泊する有馬勇の家に足を運んだが、義雄は旅に

[13] 伴悦「解説・解題」（『岩野泡鳴全集第三巻』臨川書店、平七・二）576-577 頁

臺灣大學學術期刊資料庫

出て不在だった。物語には主にお鳥と有馬夫婦とのやりとりや、お鳥の思い悩む様子が描かれる。〈五部作〉主人公田村義雄不在の物語とも言える。

〈一元描写〉言説の核心は、作者がある一人の作中人物の「気ぶんにな」り、その人物「甲乃ち主人公とすれば、作者は甲の気ぶんから、そしてこれを通して、他の仲間を観察し、甲として聞かないこと、見ないこと、若しくは感じないことは、すべてその主人公には未発見の世界や孤島の如きものとして、作者は知つてゐてもこれを割愛」することである[14]。泡鳴は「甲」に「仲介者」という呼称をも用いており、「仲介者」とは「作者の主観移入」した人物を指しており[15]、物語論（ナラトロジー）で理解するなら、焦点人物のことに当たる[16]。

〈五部作〉において〈一元描写〉を実践するならば、作者は焦点人物の田村義雄が知覚しえないことを描写できなくなる。〈初出五部作〉から〈新潮五部作〉に収められる段階でなされた削除の多くはこのためである。さらに、テクストCが誕生したのもこれと同じ理由によるものだと考えられる。

三、〈一元描写〉による徹底的な改稿

では、〈お鳥の苦み〉のテクストBとCとの比較を始めたい。まず、論者が指摘したいのは、CはBから切り取られたそのままではないことである。以下に示した部分は、Cでは完全に削除されている。

お鳥が帰つた跡で、勇はお綱に向ひ、／『可なりいい女ぢやア

[14] 第十一巻、313頁
[15] 第十一巻、320頁
[16] 小稿において物語論の用語を使う際、ジェラール・ジュネット『物語のディスクール』（花輪光・和泉涼一訳、水声社、昭六○・八）を踏まえている。ジュネットは、物語を語る方法は視覚によるものだけではないとし、「視点」に代わる用語として、「焦点化」を採用している 。そして、泡鳴の〈一元描写〉は、ある作中人物の知覚から語る、「内的焦点化」を唱えるものと理解できる。しかも、泡鳴は、特定の人物一人のみに焦点化することを目ざした「内的固定焦点化」に限って認めている。

臺灣大學學術期刊論文授權

ないか？』／『さうですか』と、お綱は笑つて自分の所天を横目に見る。『あなたも田村さんと一緒で、若ければいいのでしょう。』／『さうも限らない。然しあれなら、田村の誇つてた通り色も白いし、肌合もいいし、また極健康らしいから。』／『けれど、あの赤毛の廂髪が添はない上に、あの青ざめた顔を御覧なさい―おそろしくなりました、わ。』／『ありやア心配でだらうよ。』／『それに、高慢なこと！』／『そこはおれも実際面白くなかつた、ね、然し似たもの夫婦で、よからうよ。』／かう云つて、二人は互ひに義雄等に対する冷笑の顔を見かはした。（B）

これは、お鳥が帰った後、有馬勇・お綱夫妻がお鳥の噂話をしている箇所である。有馬夫婦二人きりの会話の内容は、お鳥が聞くべくもないものである。また、引用を省くが、有馬夫婦のお鳥に対する「きつさうな、然し色の青ざめた女」という第一印象も消されている。

このような削除は、細かい表現にまで及んでいる。お鳥と有馬夫妻がやりとりをする場面において特に顕著である。B に点在する勇とお綱との思惑は、C では丁寧に削除されている。たとえば、次のような例が見られる。

『貴様の家になど頼んでもとまるものか』と云つてやりたい様な気にもなる。／勇夫婦はさうとまでは知らず、一つには、また、お鳥のこれからどうするかと云ふことをも確めて置きたいのだ。兎に角、義雄が出発の際かの女が来たら頼むと云ひ置いた言葉に対しても、たとへ家にはとめたくないにしても、さうおろそかに持てなしては置けないと、渠等は思つてゐる。／『ぢやア』と、勇はお鳥の方へ向いて、『五番館の前だらう？』（B、下線は論者による。以下同）

お鳥の有馬夫婦への反発心から、焦点が変わって有馬夫婦の思いになる。B の下線部は、C にはない。「お鳥の苦み」の登場人物は、お鳥と有馬夫妻の三人のみである。以上に示した異同を見れば、泡鳴がお鳥を焦点人物に定めたことがわかる。そして、内的固定焦点

臺灣大學學術期刊資料庫

化[17]を目ざして改稿の中で、お鳥の知り得ない情報は容赦なく切り捨てられているのである。

さらに、C には増補を伴う描写の細かい調整も見られる。次のような箇所である。

『さうでしょう、何でも角でした』と答へたが、お鳥は主人の横柄な云ひ振りを、この場合、特に癪にさわつたと見え、額に太い横皺を二三本出して、うは目にじろりと渠の顔をにらんだ。（B）

『さうでしょう、何でも角でした』と答へたが、お鳥は主人の横柄な云ひ振りを、この場合、特に癪にさわつた。自分のひたへに、こんな場合よく出ると義雄から云はれる太い横じわがまた出たかと思はれたやうに、うは目づかひをしてじろりと渠の顔をにらんだ。（C）

B にある「癪にさわつたと見え」るお鳥の姿は、有馬勇の視点か、あるいは登場人物ではない語り手の視点からのいずれかによって観察されたものであろう。いずれにせよ、お鳥本人の目に映る光景のはずがない。お鳥は自身の額にしわがよく出ることを、かつて義雄に指摘されて知ったこととして改められており、C の描写はお鳥の目を通したものに収束している。

次に挙げる例も興味深い。

客と番頭とは、変な目つきをして振り返りながら、出て行つた。（B）

客と番頭とは、変な目つきをして振り返りながら出て行くのが、こちらもちよツと追ひかけた目の中に映つた。（C）

お鳥は有馬宅を辞去し宿に戻ったが、義雄のことや自分の境遇を考えて、ついに梅毒からの痛みで痙攣を起こしてしまう。上に示したのは、客や宿の番頭などの介抱でお鳥が落ち着きを取り戻した箇所である。B は語り手による客観的な描写であるが、C では泡鳴はお

[17] 内的固定焦点化に関しては注 16 を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

鳥の視点から観察したものになっている。表現主体を明確にして物語の情報を伝える形になっているとも言える。これに続いて、宿の人に介抱を受けたお鳥の心情が次のように描かれる。

その義務をつとめさしたのが如何にも愉快な様だ。（B）

その義務をつとめさせたのが如何にも愉快だ。（C）

「愉快な様だ」を「愉快だ」としているが、様態を表す不確かな表現としての「様」を取り除くことで、お鳥の知覚から断定できる感情に改めている。焦点を登場人物ではない表現主体、いわゆる物語世界外の語り手から、お鳥へと限定しようとする泡鳴の意図がわかる。

知覚する主体をお鳥に限定しようとする泡鳴の工夫は、もう一箇所見られる。

『そりゃどうにかさします』と云つたが、そのお金が出来なかつたらと思ふと、お鳥は二人に対して気まりが悪くなつた。（B）

『そりゃどうにかさせます』と云つたが、そのお金が出来なかつたら？　さうだ、自分は二人に対して気まりが悪くなつた。（C）

ここでは、B・Cともお鳥に焦点化されている。しかし、C では間接話法の「と思ふ」を削除した上に「さうだ、自分は」を付け加えることで、お鳥の内面を語る発話が地の文に溶け込んでいる。このような変更は、内的固定焦点化への強い意思の現れと言ってよいだろう。

同じ方針による改稿は「お鈴の家」と「氷峰の断片」にも見られる。物語の時系列に沿って、「氷峰の断片」から見てみよう。島田氷峰は、お鈴との結婚に兄の了承と経済的援助を求めるため、兄のいる夕張炭山を訪れる。氷峰とお鈴の兄の会話が物語言説の中心であり、もとから氷峰に焦点化された物語である。そのため、「お鳥の苦み」のように、特定の登場人物が知覚できない事柄だからという理由で削除された箇所は見当たらない。ただし、表現上の細かい調整を指摘することはできる。B のみを次に引用する。

臺灣大學學術期刊資料庫

夜中、渠の室に忍び込み、渠をおもちやにするつもりで、女の方から重大な失敗を演じたこともあるさうだ。（B）

「渠」とは氷峰のことで、氷峰の学生時代のエピソードが語られている。B では氷峰の過去の経験はうわさ話として「さうだ」という伝聞の表現で書かれているが、C では「さうだ」の部分が削除されている。また、引用はしないがこのような伝聞の表現が削除された場面はもう一箇所ある。このような改変を施すことで、泡鳴が氷峰をこの短篇の「仲介者」と規定したことが窺える。唯一の「仲介者」氷峰の見た物語が「氷峰の断片」なのである。

次に、「お鈴の家」を見てみよう。主人公原口お鈴は、両親、兄弟の亀一郎と鶴次郎と、自分の結婚問題について話し合うが、口論に発展する。口論の際、お鈴は乱暴な弟の鶴次郎に拳を食わされ、母親に隣室に行かされる。

『向ふへ行つてお出で』と、母はさすがに優しくあしらひ、疵でもつきはしないかとお鈴の頬を調べた上、次の室へ立ち去らす。して、鶴次郎に向つて、『お前はいつも気が荒いから行けぬ。（B）

『向ふへ行つてお出で』と、母はさすがに優しく云つて呉れて、疵でもつきはしないかとお鈴の頬を調べた上、次の室へ行かせた。が、こちらが聴いてゐると、母は弟に向つて、『お前はいつも気が荒いから行けぬ。（C）

まず、母の側から描かれたお鈴に対する慰めの様子が、「云つて呉れ」るというお鈴の側からのものに変更されたことが目につく。そして焦点人物のお鈴が隣室に行かされた後、お鈴は誰が誰に話しているかは、声や会話の内容から類推するしかない。そこで、「こちらが聴いてゐると」という表現を加えている。同様の改稿は、このくだりの後にも見られる。例えば、B にある「目をしよぼつかしてゐる」母の様子は、C では「涙を呑んだやうな声」という聴覚的な表現に改められている。

さらに、〈お鳥の苦み〉にある、表現主体を明確に定めるという意

臺灣大學學術期刊資料庫

図による物語言説の修正は、「お鈴の家」にも見られる。

皆がお鈴の顔に気がつくと、左の頬ツペたが脹れあがつてゐる。たゞさへ肥えて愛嬌ある顔なのが、その脹れあがつたので、左だけが一しほ飛び出してゐる。(B)

皆がこちらの顔に気がついた時、左の頬ツペたが脹れあがつてゐることが自分にも分かつた。手を当てて見ると、たださへ肥えてゐるのが、その脹れあがつたので、左だけまた特別に飛び出してゐる。(C)

まず、固有名詞「お鈴」から「こちら」という指示語に変わることで、お鈴という主体の内面への通路が開かれる。その次、左の頬が腫れているという外部からの観察による事実も、「自分にも分かつた」と改められることで、お鈴の知覚を通してのものになる。しかも、それだけではない。「手を当てて見る」という主体の行動とそれがもたらした触覚とによって、さらに「左だけまた特別に飛び出してゐる」ことが再確認されている。

最後に〈勇の家庭〉のBとCについても少し触れておく。田村義雄の放浪ぶりに触発された有馬勇の内面の動きと、妻お綱とのやりとりが物語の中心である。短い作品ではあるが、有馬勇に内的固定焦点化する改変が見られる。泡鳴は、「勇」を「こちら」(二カ所)に変更し、妻の心理を描く箇所に「やうだ」「やうな様子をする」(それぞれ一カ所)をつけ加えている。

〈五部作〉は、田村義雄の北海道放浪の一部始終を描いた物語であり、主人公の義雄に視点を置くのは最も自然なあり方と言えよう。〈初出五部作〉の大部分は、義雄に焦点化されている。その一方、BとCのテクストを比較することを通して、〈一元描写〉が未だ誕生していない時期に、義雄以外の複数の作中人物の心理を自由に語れる物語言説が存在していることがわかる。そして、先行研究においても指摘されているように、〈新潮五部作〉として出版するに際して、義雄以外の人物に焦点化された言説が切り取られる。ところが、ここまで見てきたように、叢書『断橋』の「附録」は、削除されたテ

臺灣大學學術期刊資料庫

クストそのままではなく、さらに表現主体を明確にするように再生産されたものと見るべきなのである。泡鳴は、単に削除するのみではなく、伝聞の表現を消したり、様態の表現を追加したりするなど、様々な方法で改稿を施しているのである。かくして「主人公の見聞感知してゐるやうに書く」[18]という自らの主張を、泡鳴は見事に実践したと言えよう。表現主体そのものの言語へ近づかせようとする意図が明確に見られる。

ここまで述べてきたことをまとめると、「附録」は、〈一元描写〉によって丁寧に再生されたその理論の見本とも言うべきテクストであろう。〈五部作〉の本篇が〈一元描写〉に基づいた田村義雄の物語であるのと同様に、「附録」も清水お鳥・島田氷峰・原田お鈴・有馬勇それぞれを〈一元描写〉によって描いている。「附録」も、泡鳴の〈理論〉に対する〈実作〉なのである。そこから泡鳴の文学者としてのずば抜けた行動力を見いだすことができる。

泡鳴の死の直後には、国民図書版『泡鳴全集』が編集された。その第二巻（大一〇・八）には、「附録」が「断橋」本文に続いて全て収録されている。対して、臨川書店版『岩野泡鳴全集』は叢書『断橋』の本文のみを収録する。「旧全集」は恣意的な編集が目立つと指摘されてきた。確かに、編集方針を明示していないだけでなく、改題や複数の論文の合併が勝手に行われている。しかし、「附録」に関しては、忠実に全て収めている。このことは、泡鳴の弟子で編集にあたった大月隆杖らが、泡鳴文学において「附録」が必要不可欠なものだと理解していたことを示すのではないだろうか。「旧全集」には泡鳴の意志を正しく受け継いで編集された部分もあると言えるだろう。

四、初出「病客」の位置づけ

かくして、泡鳴が「割愛」したものを、すなわち「主人公を別に

[18] 第十一巻、313頁

臺灣大學學術期刊資料庫

して助かつた物」を「附録」として残しておいた経緯が明白になった。ここから、「附録」の存在が意味することを〈お鳥の苦み〉のテクストAとBの比較によって掘り下げてみたい。

〈お鳥の苦み〉の原型Aは、短篇小説として明治四三年五月に発表された「病客」である。『断橋』の連載では、明治四四年一月三〇日から二月一三日までの部分にあたる。連載に際して多数の改稿がなされている。その改稿はお鳥の人物造形に関する箇所に多く見られる。やや長い引用になるが、端的な一例を挙げる。

> 『はツ』と驚いたが、車をおろして貰ひ、とどろく胸を自分で押し静めながら、先づ衣物の裾を整へ、ふらつく足を踏みしめて、玄関のがらす戸を明け、静かにそれを締めて、靴ぬぎの方に進み寄る。(A)
>
> 『はツ』と驚いて、急に胸がどきまぎする。義雄がゐるなら、出て来るだらう。出て来れば、どんな顔をするだらう？こゝの主人とだけで交渉が出来るものなら、渠の顔などは見たくない様な気がする。然しまたあれだけ可愛がツて呉れてゐたことを思ひ浮べると、会ひたい様な気もする。また、自分はいくら会いたくつても、向ふが会はないと云へばどうしよう？　会つて、うらみを云はれるだらうか、それともまたはねつけられるだらうか？／一時に浮んで来るそんな、こんなの考へをいだきあげて、お鳥は車夫がかぢ棒をおろした車の上につツ立ち、よろめきさう足を踏みしめてから、車を下りる。して、がらす戸の中に、あがり口の障子を明けて、奥さんらしい婦人が立つてゐるのをじろりと見やつただけで、通りの方を向いて衣物の裾を整へる。それから、無言で玄関のがらす戸を明け、静かにそれを締め、靴ぬぎの方に進み寄る。(B)

お鳥が有馬宅前で、中に入るか入るまいかと迷っている箇所である。Aのお鳥の心理描写は「とどろく胸を自分で押し静めながら」という控え目に止まるもので、泡鳴はお鳥の行動に重心を置いて描いている。一方、Bはお鳥の独白を地の文に溶け込ませ、不安や戸惑い

臺灣大學學術期刊資料庫

をお鳥本人の思いとして直接描いており、物語言説を大幅に膨らませる。

もう一例見てみよう。お鳥が宿で自分の窮境を考えている場面である。

いやだ。如何にもいやだ。／父さへゐて呉れれば、こんなことにはならなかつた。（A）

いやだ。如何にもいやだ。／まだ兄だけならいゝが、あの他人の嫂がいやだ。慾張りで、軽薄で、お上手ばかり云つて——父が自分に残して置いてくれた物までみんなおのれの物にしてゐる！　箪笥もあつた筈だ。衣物もあつた筈だ。それを何かんと云つて、ごまかしてゐる。あんたの方づく時にはあげますと、いゝ加減なよろこばせばかり云つてゐる。あゝ、行くのもいやだ！／父さへゐて呉れれば、こんなことにはならなかつた。（B）

ここでも、泡鳴はお鳥の独白を大幅に追加しており、お鳥は兄嫁との関係の悪さまで持ち出して兄の元に行きたくないと語っている。このように、B に見られる加筆は、お鳥が直接に読者に向かって声を発するものが多い。それは物語内容に必要な情報を追加するためというよりは、描写の効果を高めるためのものと認められる。

この傾向はお鳥に限ったことではない。引用を省くが、有馬夫妻の描写にも、人物の心境を余さず描こうとした加筆が見られる。一方で、次のような語り手の存在を感じさせる加筆もある。

然し勇は例のひどい近眼だから、眼鏡をかけてゐても、それがよく分らない。（A）

然し勇は例のひどい近眼だから、眼鏡をかけてゐても、それがよく分らない。／然しお綱はそれを見とめたので、／『まア、何と云ふ顔つきをするのだらう』と心では思つたが、心で持つてゐた卑しみが一層強くなつたばかりで、表面には現はさない。／兎に角、魔がさした様に、三人の気合いが何だか合はない様になつて、暫らく、六畳敷の茶の間は、無言に支配されて、たゞ、締めた窓のもとで人々が囲んでゐる四角炉の上で、自在鍵でつるした鉄瓶

臺灣大學學術期刊資料庫

がくたくた云つてゐるばかりだ。（B）

ここでは、お綱の勇に対する嫌悪感が加筆されている。そして、三人の内面を離れて、部屋の窓や鉄瓶などの場面的な描写に移動する。それによって、その沈黙の場所にいる三人それぞれの思惑が浮かび上がってくる。なお、泡鳴の小説における語り手の問題については非常に興味深い点があるが、それを別稿に譲る予定があるため、ここでは触れないでおく。

以上に挙げたAからBへの改稿を見ると、泡鳴が登場人物の性格や考えをより具体的に描写しようとして、カギ括弧を付してはいないが、直接話法的に言説を追加している[19]ことがわかる。特にお鳥に関して大幅な追加をしていることから、泡鳴は長篇作品において田村義雄以外の人物描写にも力を入れる必要があると考えたのだろう。また、その際には登場人物の内面にまで踏み込んでおり、焦点化される人物を一人にしようとする意図は見られない。これは〈一元描写〉言説に背く改変である。つまり、この段階では、泡鳴はすべての登場人物の内面描写を膨らませようと腐心していたのである。

泡鳴が最初に発表した小説は短篇「芸者小竹」（『新古文林』明三九・三）である。ただし、出世作は「耽溺」（『新小説』明四二・二）であり、初めて高い評価を得た。「耽溺」の成功が、泡鳴に明治四二年の後半から、〈五部作〉制作の原動力となったことは疑いないであろう。ただ、「耽溺」までに体得した方法が〈五部作〉のような長大な物語世界に直結できるかどうかはやはり疑問だと言わなければならない。

「耽溺」以前の小説を俎上に乗せた同時代の評論には、物語の主

[19] 菅原克也氏は「日本語で書かれた小説において、直接話法的な語りと間接話法的な語りを、文法的な指標によって区別することが難しい」と問題を指摘し、「語り手による発話の語り方の違いは、以下の二つの点から考えることになるであろう。第一に、カギ括弧の使用の有無といったきわめて外形的な指標による区別。第二に、発話の語りのなかに語り自身の声をどの程度聞き分けることができるのかという、読者の判断にかかわる区別である」と述べている。『小説のしくみ：近代文学の「語り」と物語分析』（東京大学出版会、平二九・四）282頁

臺灣大學學術期刊論文授權

人公を造形する力量不足を批判したものが目に付く。たとえば、鰺生は「日の出前」(『太陽』明四一・四)について、「議論ばかり多くて主人公の性格など少しも分らない」と難じている[20]。片上天弦は、「老婆」(『趣味』明四一・五)の主人公の老婆は「たゞ食ひ気ばかりが現在の命である、といふ作者の解釈が、明かであるだけに、描かれた婆さんよりは、その解釈の方だけが読むものゝ心に残つて、婆さんは十分に現はされてゐない」と批判している[21]。また、「栄吉」(『趣味』明四一・一〇)に関しては、「いゝ材料だが遂に説明に終つてゐるので、栄吉が活躍しない」[22]という声がある。このように、泡鳴は人物描写の未熟さに由来する批判に直面したのである。登場人物の性格や心理をリアルに描くことができないと、作品は単に「説明」や「解釈」になってしまい、「耽溺」で得た成功までもが水の泡になる恐れもある。

そのような中で、〈初出五部作〉の最初の長篇『放浪』は書き下ろしとして明治四三年七月一日に東雲堂書店より刊行された。その序文「『放浪』を作つた実感と所信と」によれば、もとの分量は計六一回、七四〇枚である。さらに、「この『放浪』は全部を一冊にしたかつたのであるが、出版社の都合上、二冊に分つことにした。これはこの前篇である。続篇の出版は一二ケ月後になるだらう」[23]とあるのだが、出版社の都合によるのか、二冊目は出版されていない。続篇に相当するのは、明治四四年一月一日から「毎日電報」に連載された「断橋」である。『放浪』序文は明治四三年五月二二日付であるため、この時点で、「断橋」はすでに書き上げられていたと見てよいだろう。

ところが、泡鳴は「断橋」の連載に先立ち、その一部「病客」を短篇として雑誌に掲載している。この小説の切り売りは、生活に苦

20 鰺生「小説月評」(『文章世界』明四一・四)
21 片上天弦「小説月評」(『文章世界』明四一・五)
22 無署名「十月の雑誌」(『文章世界』明四一・一〇)
23 第十五巻、447頁

臺灣大學學術期刊資料庫

しみわずかな原稿料を求めたためとも考えられる[24]。確かに『放浪』の一部の「結婚問題」が『放浪』の出版直前に雑誌に掲載されたのは、金銭的理由によるのだろう。しかし、〈お鳥の苦み〉のAからBへの改稿については、ここまでの考察からもう一つの要因が浮かんでくる。文壇という大きな池に短篇という石を投げ、波紋がどのように広がるのかを見て、長篇の人物描写を調整しようと試みたと考えられるのではないだろうか。

この時期に、長篇に先行して切り売りされた短篇は四つある。いずれも人物を中心とする物語で、そこには、川本（「川本氏」[25]）・敷島（「柳の糸」[26]）・氷峰とお鈴（「結婚問題」）・お鳥（「病客」）が色濃く造形されている。「病客」に対する同時代評として片上天弦の指摘がある。

> 岩野泡鳴氏の作は、趣味の『病客』、ハガキ文学の『結婚問題』ともに近々氏が公けにする筈の長篇『放浪』の一部を切り離したものであると聞いた。〔中略〕今度の二篇でも、それぞれに見て全くまとまりのつかないでもない。作者は重もに心理的事実を精細に書き現はさうとしてゐる。『病客』のお鳥の心持ちは随分思ひ切つて余さずに書いてある。近頃の氏の作は、どれにも生硬なところがまだ取れてゐないが、それでも興味を引くのは、人物の心理を思ひ切つて発かうとしてゐるからである。氏がなかなか想像力の強い人であるといふ事はこれ等の作を見てもわかる。[27]

天弦は人物の「心理的事実」について高く評価しており、「病客」の独立した作品としての価値を認めている。前述の通り、「病客」は、

---

[24] 泡鳴自身も「『放浪』を作つた実感と所信と」で原稿の掲載に関して出版社と交渉することが「僕の様に余裕のない生活をしてゐるものには、実に不安でもあり、苦痛でもある。骨を折つて書きあげても、それを引き受けてくれるものがあるか、どうか？また、引受けても、直ぐ原稿料をくれるか、どうか？」と告白している。第十五巻、445頁

[25] 『趣味』明四三・一

[26] 『早稲田文学』明四三・五

[27] 片上天弦「小説月評」（『文章世界』明四三・六）

臺灣人文學術期刊資料庫

泡鳴が〈五部作〉の主人公田村義雄以外の人物の内面描写に力を注いだ作品である。そして、小手調べとして長篇より先に発表され、好評を勝ち取った。これによって、泡鳴は人物造形を高めることの必要性をさらに実感したに違いない。

前出の『放浪』の序文によれば、「病客」は長篇の一部分としてすでに完成していた。それにもかかわらず、雑誌に発表後から連載開始までの約半年の時間を利用して、泡鳴はさらに人物描写を膨らませようとしている。その結果、テクストBが生まれたのである。

この事実を以て、叢書『断橋』の「附録」の意味を考えると、「附録」は、〈五部作〉の生成過程で非常に重要な意味を担ったものと言えるだろう。また、文学者泡鳴がにおいて企てた方法上の試みも、異なる段階のテクストの比較を通して見えてきた。泡鳴が〈お鳥の苦み〉などを切り捨てずに「附録」として残したのは、〈一元描写〉の見本にするためだけではないだろう。初出段階で登場人物の造形で高評価を得たため、泡鳴の中では、義雄以外の人物を描いたテクストも、きわめて捨てがたいものであったに違いない。人物造形の必要性を強く感じつつ、内面描写や語り方などを模索していた泡鳴の姿はここまでの考察を通して具体的に見えてきた。義雄を焦点人物にした本文と、他の人物を中心にした断片とが一冊の書物に収められているという叢書『断橋』の独特な形式は、このようにして成立したのである。

五、「附録」の意味

泡鳴が初版『放浪』と連載「断橋」に先だっていくつかの断片を発表したことは、臨川書店版『岩野泡鳴全集』の編集段階で初めて明らかにされたことである。新全集の編集出版によって「五部作」の生成過程が相当に見えるようになり、資料の入手も容易になった。小稿もその恩恵にあずかったものである。編集委員の紅野敏郎は「「実業之北海」をめぐって」で、切り売りされていた事実に驚きを示しつつ、初出を読むことの重要性を説いている。そして、泡鳴が

臺灣大學學術期刊資料庫

五部作の序文などで切り売りに言及していないことから、「泡鳴が「柳の糸」とか「病客」の発表を重要なものとは思わず、ほとんど意に介していなかった」[28]と判断している。

しかし、旧全集は、「附録」をそのまま収めている。旧全集の編集方針は恣意的であると評されてはいるが、この事実から、そこには考えるべき課題が残されているのである。さらに、〈五部作〉を論じる際には「附録」や先行する初出作品も視野に入れるべきだということを示唆している。

小稿では叢書『断橋』の「附録」にまとめられたテクストがもつ意味を、〈お鳥の苦み〉の三つのテクストを比較することを通して考えてきた。「病客」が連載「断橋」の一部として発表される際に、物語内容に関しての変更はない。だが、泡鳴が人物の内面描写に力を注いだ改稿が目につく。そこから〈一元描写〉を志向した手入れがさらになされる。最終的に「附録」の「お鳥の苦み」として、泡鳴は「割愛」しきれずに「助かつた物」を残すという選択をしたのである。たかが「附録」と思われるかもしれないが、この「附録」は、〈五部作〉に関するだけではなく、明治から大正へ進化を続ける泡鳴の小説や理論を理解する上で決して看過できない重要なテクストであると言うべきだろう。

【付記】引用に関して、漢字は通行の字体を用い、改行は「／」で示し、ルビは適宜略した。本稿は中華民国科技部専題研究計画「岩野泡鳴「五部作」之研究」（NSC102-2410-H-032-093）に基づくもので、「二〇一四年度日本近代文学会秋季大会」（於広島大学、2014.10.19）と「二〇一四年国立高雄餐旅大学応用日語系「観光、言語、文学」国際研討会」（2014.5.31）で口頭発表したものをもとに大幅に加筆修正を行ったものである。席上及び発表後にご教示くださ

[28] 紅野敏郎「「実業之北海」をめぐって」（『岩野泡鳴全集第三巻』臨川書店、平七・二）560頁

臺灣大學學術期刊資料庫

った方々へ感謝を申し上げたい。

【参考文献】

王憶雲（2017）「岩野泡鳴〈五部作〉の構想と生成」『国語国文』
大久保典夫（1994）「解説・解題」『岩野泡鳴全集第二巻』臨川書店
片上天弦（1908）「小説月評」『文章世界』
片上天弦（1910）「小説月評」『文章世界』
紅野敏郎（1995）「「実業之北海」をめぐって」『岩野泡鳴全集第三巻』臨川書店
鰺生（1908）「小説月評」『文章世界』
ジェラール・ジュネット（1985）『物語のディスクール』花輪光・和泉涼一訳、水声社
菅原克也（2017）『小説のしくみ：近代文学の「語り」と物語分析』東京大学出版会
高山京子（2002）「泡鳴五部作について」『文学と教育』
伴悦（1995）「解説・解題」『岩野泡鳴全集第三巻』臨川書店
無署名（1908）「十月の雑誌」『文章世界』
和田謹吾（1975）『描写の時代：ひとつの自然主義文学論』北海道大学図書刊行会

臺灣大學學術期刊資料庫